本興寺だより

令和三年
十一月
第二二七号

「財あるも財なきも、命と申す財に勝る財はない。されば昔の聖人賢人と申す人は、命を仏にまいらせて仏になり給う。いわゆる雪山童子と申せし人は、身を鬼にまかせて八字を習えり」（宗祖　事理供養御書）

秋も深まり、野や山を見ると色とりどりの紅葉の美しい風景が見えます。

人生を四季に例えれば、秋は晩年。冬支度を前に、その人が歩んだ一生のカラー（色）が紅葉のように輝く時でもあります。人の一生は「歳月人を待たず」で早いものです。百年にも満たない一生ですが、楽しいことよりも、苦が多いと感じる人生であります。

日本人の平均寿命は男性が八十一・六四歳、女性が八十七・七四歳です。人は何歳まで生きられるつもりでいるでしょうか？誰でも最低平均寿命以上、百歳近くまではと思っています。それも元気で自由に活動が出来て、最期はコロッと一生を終えたいと思っていますが、そんな人は少ないのです。平均寿命までに半数の方が亡くなられるのです。また命に生老病死がある以上、人は老いと病を必ず体験させられるのです。人生は老いも病も苦しみです。更に苦しいのは、心が悩み、傷つく精神的な苦しみです。人間関係であったり、生活苦であったり。

限られた期間である人生の半分以上は、悩み、苦悩と共存して生きる日々です。その日々を否定して後悔すれば命の浪費となり、心が疲弊して寿命を知らず知らずのうちに縮めていると云われます。

どんな苦しみの中にあっても、その苦しみを正面から受け留めていく覚悟、素直さの中から光が見えてきて、神仏の救いの力が差し込むのだと云われます。

日蓮聖人は、「苦楽共に思い合わせて南無妙法蓮華経と唱え奉るべし」と教えています。

森羅万象の命は本来どういうものか。人はどう生きるべきか？を知る一例として仏様は次のような話を経文に説かれています。

お釈迦様が過去世に於いて、ヒマラヤ山脈の雪山で修行されていた時（雪山童子と呼ばれる）に、帝釈天の神が羅刹（鬼）の姿をして現れ、「諸行無常」「是生滅法」（一切のものは時間の推移とともに生滅変化し、不変の物はない）と説かれた。この句を聞いた雪山童子は感動し、後半の残りの句を聞きたいと羅刹に願った。しかし羅刹は「私は何日も食べてなく飢えている。もし童子の命をくれるなら残りの句を説いても良い」と話した。童子は意を決して承諾した。そして羅刹が説いた後半の句が「生滅滅已」「寂滅為楽」（身をわずらわし、心を惑わす煩悩のとらわれを滅すれば、心が安らぎと喜びの仏の境地に近づき不変の魂の世界があることに気付く）と説かれた。童子はその教えを石に刻み、道や樹木、木の葉に書いて残し、「後に道を求める人の目に留まり、必ずその人が成仏の悟りを得られる糧となるように」と祈り、いざ羅刹に身を投じた時、羅刹は帝釈天の姿に戻り、空中で童子の身を受け止め、「あなた様こそ真の菩薩です。未来に悟りを開かれた時には人々をお救い下さるようお願いします」とひれ伏されたのです。

法華経には、「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」とあります。

身命を惜しまずとは、命を粗末にすることではありません。身命とは身体と命。身命とは、生きていく上での自分の行動、物の見方、考え方を含めた己の命です。私達が小さい頃から自分の身命に染みついた生き方は非常に強固であり、なかなか自身の思考や価値観は変えられないと云われます。

だから先の雪山童子が身を呈して教えを求めたように、人も自身の思考や生き方の信念を一度リセットして放し、仏の教えに耳を傾け、人としての本当の生き方を知り、その道を進みなさいと云われます。

また江戸時代には、武士の切腹を介助する介錯（かいしゃく）人は、代々特定の武家が引き継いで行ったということです。介錯は打ち首とは違い切腹をする武士の介助をする尊厳を伴った仕事でした。介錯人は切腹と同時にこの四句を心で唱え、最後の「寂滅為楽」の言葉で斬首（首を切る）したということです。当時は罪はなくても政治的な理由で切腹した人もいます。

亡き人を送る時、以前は野辺の送りの葬列に四本の旗を立て、そこには先の四句「諸行無常」「是生滅法」「生滅滅已」「寂滅為楽」がそれぞれ書かれていました。如何なる最期でも逝く人の心も肉体も生前の想いと憂いを離れ、あの世での安穏が得られることを願って。

人はどういう一生を歩んでも、自ら歩んだ人生を肯定して、安らぎを持って、魂がこの四つの句の世界へ向かうことが大事なのです。

仏様は人は本来生まれることも死ぬこともない世界にいるのだと云われています。

生と死を超えて続く尊い命だからこそ、また人間の魂の業の修正ができるのは肉体を持つこの世であるからこそ、今世の生き方が大切だと説かれています。

合掌　本興寺住職　中谷聰秀